

## 5 セント・エドモンドの夕べ

ああ 黒衣の修道士が行くのを見たか  
その苦悶の顔を見たか  
真夜中のミサを捧げに行くところ  
聖なる町セント・エドモンドで

埋葬の聖歌を捧げに行くところ 5  
さまよう靈魂を眠らせに行くところ  
姿なき靈が休みなく出沒するのだ  
今宵も修道院の物寂しい側廊に

その靈のむせび泣きはずっと続くという 10  
聖なる修道士が傍に来るまで  
墓に安らぎの祈りを捧げるまで  
神聖な涙で墓を濡らすまで

修道士の馬は頑丈で剛健 15  
行く道は平々坦々  
けれど 修道士はのろのろ進み  
顔は不安で曇っている

こんな遅くに修道院に来たのは誰だ 20  
正門の呼び鈴が陰鬱に響く  
死神の眩き声のように  
吊いの鐘のように

修道士はふらつく膝を三度つき  
身体は恐怖で震えた  
声がした はっきりと大きな声で  
「覚悟せよ お前の臨終の時は近い」

十字をきり 祈りの言葉をつぶやき 25  
修道士は天を仰いだ  
修道院長が見つめる視線にも  
傍でつぶやく黒衣の集団も目に入らなかった

頭巾をとって 神聖な壁龕<sup>へきがん</sup>に立つ  
眉をひそめた彫刻の聖人達に祈りを捧げる 30  
修道士は青ざめ 身体<sup>からだ</sup>は震え 生気を失い  
修道院長の足元<sup>ひざまず</sup>に 跪いた

修道院長の黒衣にすぐさま口づけをした  
「神の恵みは汝と共にある  
霊もそなたの祈りの前には 35  
朝靄<sup>あさもや</sup>のように消えるであろう

さあ中へ 食事の準備ができている  
風が身を切るように冷たい  
セント・エドモンドの鐘が鳴るまで  
霊は地中の寝床で休んでいる 40

今夜は疲れた身体を休めなさい  
長旅をしたのだから  
月明かりの側廊で金きり声をあげ  
泣き叫ぶ霊を鎮めるのは 明日にするが良い」

「ああ 体には力が入らず 胸も凍<sup>こご</sup>えるようです 45  
ですが今夜 霊を鎮めなければなりません  
今夜 恐怖の時間が告げられるとき  
彷徨<sup>さまよ</sup>う霊と会わなければなりません

食べる間も休む間もありません  
お聞きください こちらへ音が響いています 50  
大きな鐘の音 ああ急がねばなりません  
霊の出る側廊へ連れて行ってください」

光がゆっくりと前を動いていく  
手に十字架を掲げ  
黒衣の修道士は穏やかな微笑<sup>ほほえ</sup>みをたたえ 55  
しかし 目は恐怖でかすんでいた

一行は古くなった階段を上っていく  
礼拝堂の門を開け  
低い声で一心に祈りを捧げる  
しかし その胸は恐怖<sup>こご</sup>で凍えていた 60

不安げに進んでいた一行はしばらく足を止め

その荘厳な情景を見つめた  
暗闇に立つ柱の隙間から  
青白い月の光がもれていた

「さあ院長様 修道院のどこの暗がりにも  
その彷徨<sup>さまよ</sup>う霊は隠れているのです  
黒く不浄な どの墓に  
その祝福されぬ死体は葬られているのです」

「向こうの暗い回廊を霊は歩きながら  
悲しげに嘆いている  
黒衣の修道士よ 霊は狂ったようにお前のことを話し  
その上 お前の守護聖人に訴えている

今夜 ある巡礼者が  
セント・エドモンドの礼拝堂で祈りを捧げたとき  
黒い大理石の墓から 霊が起き上がり  
向こうの丸天井の下に横たわるのを見て戦慄<sup>おのの</sup>いた」

「ああ！ あの黒い大理石の墓には  
どんな悲しい記録が刻まれているのだ」  
「その墓は教会堂の内陣にひっそりと置かれ  
悲しい記録はなにも刻まれていない」

黒衣の修道士は腰に下げたロザリオを手に  
主の祈りを唱える  
すぐさま教会堂の内陣の扉にたどり着くと  
扉がひとりで大きく開いた

抗い難い奇妙な音が 修道士の足を  
その黒い大理石の墓へと向かわせた  
「ああ お入り 黒衣の修道士よ」 ささやく声が  
「ああ こちらへ あなたの死ぬ時が来たのです」

足をとめ ロザリオを手に祈りを唱え 敷居をまたいだ  
何ということ 扉が閉まり  
大きな叫び声が吹き上る一陣の風に運ばれた  
そして 低い消えそうな呻き声がした

修道士たちは驚愕し 震えていたが  
次の瞬間 暗い礼拝堂の内陣へなだれ込んだ

セント・エドモンド修道院から 見よ！骸骨が 95  
黒い大理石の墓を指差している

見よ！あの深く刻まれた 真っ赤な血の碑銘を  
くっきりと浮かび上がるあの生々しい文字を  
「エルムハムの罪深き黒衣の修道士亡くなり  
その妻ここに眠る」 100

エルムハムの塔で 修道士は修道女と結ばれ  
セント・エドモンドにその花嫁を連れてきた  
その夜から 女の修練期が始まり  
修道士のグレーの衣を身に付けた

ああ 女の良心は罪意識に 苛<sup>さいな</sup>まれ 105  
後悔をしばしば口走った  
女は冷酷な修道士の手にかかって血を流し  
死をもってその口を封じられた

女の霊はこの夜から懺悔の日々を運命づけられた  
修道士が自らの罪を悔い改めるその日まで 110  
ここに二人は墓に葬られ共に眠るのだ  
その死体が朽ちて消えるまで

聞け！大きな雷の轟きが屋根を揺るがし  
煌<sup>きら</sup>めく稲妻が祭壇の周りを戯れる  
修道士たちは離れた所 恐怖で声もなく立ちつくしていた 115  
嵐は突然止み 消え去った

血の碑銘も消え去った 残ったのは  
暗闇の中に輝くロザリオと十字架  
黒衣の修道士を見ることは二度となかった  
かの霊がああ黒い大理石の墓に現れることもなかった 120

(伊藤真紀訳)